

私の住まいは朝霧高原でも標高が低い方（海拔約700m）ですが、すでに紅葉も終わりに近づき、落葉が目立ってきています。自宅の庭と私有地である山林も同様に紅葉のピークは過ぎてしまっていますが、母屋と離れの間にあるシンボルツリーである楓（カエデ）は、まだしっかりと緑の葉を残しながら赤い葉を増やしています。

私の家は小川を挟んだ古い別荘を改築し、渡り廊下でつないだ構造になっていて、この小川の途中にある小さな池の畔にその楓があります。池には野生の蜚が生息し、7月には蜚が舞い、楓に止まります。夏にはこの楓が木陰を作り、浅い池の水温が上がり過ぎないようにし、冬には日が差し込み、池が凍るのを妨げてくれます。池の生物・生命に大きくかかわっている楓の葉が、土に帰る前にその存在感を示しているようです。

紅葉。について少し調べたところ、夏が終わって朝晩の気温が低くなると、落葉樹は冬支度として葉と枝の間の水や養分を運ぶ脈管を閉ざし、その結果、葉がさまざまな色に変化します。樹木の種類により赤くなるもの、黄色くなるもの、褐色になるものがほぼ決まっています。一口に紅葉といいますが、黄色くなるものを黄葉（おうよう）、褐色になるものを褐葉（かつよう）ともいいます。

葉の中の葉緑素が壊れて緑色が消える、今まで目立たなかったカロチノイドという黄色い色素が目立ってくるのが黄葉。一方、葉の中に残った糖分が使われて、アントシアニンという赤い色素ができて葉の細胞内に広がったものが、紅葉なのです。アントシアニンという目には良いとされるサプリメントに含有されている成分とい

目にもやさしいシンボルツリーと



う印象が強いのですが、目の機能のみならず保養にも役立っているのかと驚きました。楓のことを別称として「もみじ」と呼ぶこともあります。紅葉は「もみじ」とも読みますが、これは京都の高雄山の楓がよく紅葉したので、紅葉の代表とされて楓を「もみじ」と呼ぶようになったことです。

赤くなる葉が本来の紅葉なのではないかと思いますが、楓は紅葉する植物の中で最も美しいために、いつからか、もみじといえは楓のことをさすようになったそうです。黄葉する木といえはイチョウで、褐色に色づく葉は、ブナ、カシワ、クヌギ、コナラ、クリなどブナ科の仲間によく見られます。私の敷地でも、褐色に色づく樹木が中心です。色づいた葉の多くが秋に落葉しますが、カシワやクヌギ、アベマキなどは枝に落ちませんが、春に新芽が出るころに落葉するそうです。

次に紅葉日と落葉日ですが、気象庁では、各地方気象台の近くに標準木を定め、その木の葉の約8割が紅葉した最初の日を「紅葉日」、約8割が散った日を「落葉日」として、情報を全国に発信しています。主にイロハ楓、イチヨウが標準木とされ、毎年同じ木で観測されています。やはり紅葉の主役は楓のようですが、紅葉がきれいになる条件、鮮やかに美しく色づくためには、①昼と夜の寒暖差が大きいこと、②太陽の紫外線がよく当たること、③適度な湿度があることだそうです。この温度・光・湿度の3つが必須条件です。

確かに日が当たり湿度の多い場所にいる我が家のシンボルツリーは、最高の環境で育っているようです。あと数日で、すべての葉が真っ赤となり、その後、落葉していくでしょう。

そして、この楓の紅葉が終わりに、多くの葉が落ちると、寝室からは冬限定の白い富士山が見えてきます。そして、その富士山の肩から日が昇るのを布団の中から眺めることになります。今朝も、診療所へは紅葉が敷き詰められた道を行きますが、帰りには村の方々が、落ち葉を森へ返してくれています。

隔週水曜日掲載の連載です。次回
は12月2日に掲載致します。

Profile：山本 竜隆

聖マリヤンナ医科大学 大卒。医師。医師・医療
プログラムを経て、大田舎予防
の地域活性化統合医療の構築を
目指して活動中。